



# 藤香会だより

第4号

平成20年1月1日発行

発行者

藤香会事務局

092-541-8268

発行責任者

中島 敏行

## 年頭に当たつて

副会長 中島 敏行



昨二〇〇七年は、福岡城築城から四〇〇年という節目の年で、「福岡城市民の会」の活発な福岡城の天守閣復元キャンペーンをはじめ、黒田藩にかかわるさまざまな催しがありました。また、それらのイベントが新聞をはじめテレビなどのメディアによって報道され、私たちの目を引きました。

お陰で福岡の歴史を訪ね、福岡の文化を後世に伝えていこうという私たちの活動が福岡の市民・県民の皆さんに少しずつ知られるようになってきたように思います。

この運動は、まず多くの人に知ってもらうことが第一です。その次が理解と協力をしてもらうことです。

今年も会員の皆さまには、元気で、一人ひとりがこの運動を一步でも進めていただきますようお願い申し上げます。

## 長政公二八五回

### ご法要

ご法要の前日未明、福岡地方を台風5号が通過したため、八月四日のご法要当日は曇天の一日となりました。これまで一般には広く知られていなかった、崇福寺での旧福岡藩主の祭礼につ



石瀧豊美先生の講演

いて、昨年は福岡城築城四〇〇年の記念の年とあって、事前に地元の新聞、福岡市の「市政だより」・ホームページ等で報道されたため、ご法要には約一〇〇人の一般参詣がありました。藤香会会長以下五三名の会員と合わせ、一五〇人にのぼる参列者による盛大なご法要となりました。

本堂での法要と、場所を移つての墓前焼香のあと、福岡黒田藩に継承されてきた柳生新影兵法の剣舞が、柳心会一〇名の剣士によって奉納されました。

ご法要終了の後も、セミしぐれの中、カメラを手にした参詣者たちが菩提所境内を散策する姿がいつまでも見られました。

## 第3回 勉強会

講師は、福岡地方史研究会会長で、当藤香会の会員でもある石瀧豊美先生にお願いしました。

演題は「福岡藩の石高と知行・年貢」で、江戸時代の政治の制度や社会のしくみ、また武士・農民の生活の基盤となる「米」の収量、すなわち石高について一時間半の講演がありました。

講演の内容は、例えば、福岡藩の石高は、いつ、どのようにして決められたのか。先生の話を端折ると次のようになります。

元和二年(一六一六)、幕府の公命に対し、長政公は黒田領の石高を、検地の結果として、五〇万二四一六石三升一合三勺と届け出られました。寛永十一年、第二代の忠之公は、

## 光雲神社 西公園鎮座百年 記念大祭

黒田如水公・長政公の御両公を祀つた光雲神社は、明和五年、城内本丸に創建されました。ところが、ほぼ一〇〇年のちの廃藩置県で黒田家の東京ご移転のため、光雲神社の社殿は城外の警固神社に新造されました。

さらに光雲神社が現在地の西公園に遷座となるのは明治四十年(一九〇七)で、昨年、社殿が全面改築され荒津山鎮座百年大祭となったわけです。

大祭には黒田家第十六代長高様も来臨され、盛大な記念祭行事となりました。

大祭は神事から始まり、続いて記念式典。式典のなかでは黒田二十四騎の馬揃え、抱え大筒の演武など如水・長政御両公時代を偲ぶイベントもはやり、見物の人たちの興味をひきました。

式典のあとは武道や伝統芸能の奉納が



大祭参列者の記念撮影(社殿下の石段にて)

続き、西公園の山上は三味線、尺八の音曲でにぎわいました。藤香会からも山崎広太郎会長はじめ約三〇名の会員の顔が見られました。

筑前の国のうち、これまで除外されていた怡土郡うちの寺沢志摩守領(現前原市の一部と二丈町)の石高二万〇六八三石九六八七勺を新たに届け出られました。

これに対して將軍家光公は、その追加の届け出を認めて、黒田領の石高は、秋月・東蓮寺領を含め、五二万三〇〇石の御朱印を賜りました。

以後、これが福岡藩の表高(公式の石高)となります。

石瀧先生は、この表高決定までの経緯を、資料をもとに詳しく説明されました。以下、武士の収入や格付、農民の年貢の負担など、藩政時代の武士と庶民の生活について、とくに米経済の面から話を進めていかれました。

# 恒例の〈秋の史跡めぐり〉で 小石原中野焼開窯325年記念祭 に参加



秋たけなわの10月21日(日)朝、藤香会一行41名を乗せた貸切バスは福岡天神を出発し、一路南下。旅は旧筑前黒田領を北の端から東南の、豊前との国境までの縦断コースとなりました。バスには前日、光雲神社の大祭にご臨席の黒田家第16代の長高様も同乗されました。当地での式典とイベントは約200人の参集者を迎え、スギ木立に囲まれた小石原中野の古窯跡で行われました。神事後、昼食と舞台での演芸をたのしみ、小石原焼の名品の数々にもふれることができました。このあと、記念祭主催者の太田和孝氏に見送られて、一行のバスは行者堂、筑前黒田城の1つ松尾城跡、道尾駅、高取焼宗家などの小石原めぐりをし、帰路、長高様とは福岡空港でお別れとなりました。蒼天を戴いてのさわやかなツアーの1日でした。

## 福岡城跡

### 「下の橋大手門」の復元上棟式

平成十二年八月、不審火で一部が焼損し、その後焼け残った「門」の部材は解体されて、福岡市教育委員会によって調査と復元作業が進められてきました。工事



上棟式の1コマ

事は今年秋完成が予定されていますが、昨年九月二十八日、上棟式と復元状況の説明会がありました。上棟式には藤香会にも招待があり、お祝いのお雛子の

## 福岡城市民の会が 「福岡城・黒田五十二万石 の歴史と観光展」を開催

九月二十二(日)・二十四(祝)の両日、表記見出しの「歴史と観光展」が、中央区赤坂の「よみうりプラザ」で開かれました。会場からは福岡城跡がすぐ目の前です。会場内には福岡城にちなむ六端城、秋月・中津城の模型、二十五騎の兜のレプリカなどが展示され、ビデオからは「市民の手で福岡城の復元」と「アジアの交流都市の創造」を目指す、「市民の会」の石井幸孝理事長の熱のこもった解説とアピールの声が流れていました。初日の二十日には希望者二〇名が広

## 「おほほりまつり」で 黒田二十五騎が行列

い城内の現地学習をしました。騎馬武者の練り歩きで知られる「おほほりまつり」が九月二十四日、晴天の秋分の日に行われました。午後一時、黒田藩ゆかりの西公園光雲神社を出発した稚児や武者姿の約一五〇人の一行は笛や太鼓の囃子に合わせ、大濠公園を通過してNHK福岡放送局に着きました。

## 柳生新影流 演武大会開催

NHKの舞台では、筑前琵琶など福岡の伝統芸能からバンド演奏やフラダンスまで演じられ、城下町のむかしを偲び、明るい未来を願った一日でした。黒田家の墓前演武奉納でおなじみとなっている福岡黒田藩傳柳生新影流兵法の「第十四代宗家・長岡鎮廣氏の宗家継承十周年記念演武大会」が昨年十月六日、福岡武道館で開催されました。演武は黒田家第十六代長高様を主賓に迎え、午前一〇時から昼の休憩をはさんで一五時まで行われました。

## 如水庵が一冊の本に

肅然とはりつめた雰囲気のみならず、演武と演武の間には大和歌、日本舞踊、鹿児島の野太刀自顕流、筑前琵琶、筑紫舞などの賛助出演があり、大会は日本伝統の文武の祭典の観がありました。その書名は『筑紫菓匠五十二万石如水庵―創業四二〇年の軌跡―』です。執筆は本会の荻野忠行理事で、資料の提供と監修は、これまた本会の会員でもある森悦次郎社長です。著者は「会社」のみの軌跡を追うのではなく、むしろ地元の歴史とともに発展してきた会社、町とともにあった会社という考え方で、まず、の地誌と商人の

歴史を具体的な資料で示していきます。一読して、これまで一〇冊以上の福岡にちなむ「歴史物」を著してきた、著者の蒔蓄もうかがわれ、もう一度ページをめくりたくなる好著です。



## 会員クリック③

### 藤香会への思い

藤香会理事 諸岡京子

諸岡さんは本会の事務局担当理事です。前副会長で、筑前近世史の研究者としても著名であった山内勝也氏は実父に当たります。藤香会には早くから入会していましたが、勤めていたので時々しか参加していませんでした。父の藤香会に対する思いは深く黒田家の歴史をよく調べていました。機会があれば講演もしていました。晩年になり、ご迷惑をかけてはと、長久様の空港でのお出迎えやお見送り、恒例のご法要、史跡めぐり、進藤一馬会長のお見舞いなど、私が父といっしょに出かけました。このようなことから、理事会に参加させてもらうようになりました。父が亡くなりましたとき、長久さまから古の黒田の歴史を勧められた。君の真意忘れまじと、ご丁寧なお言葉をいただきました。父の藤香会に対する思いを中島副会長が引き継いでおられますが、副会長のご苦労をみてみると、何につけても父のことが思い出されます。歴史を想い、黒田家のご法要を中心とした集いに参加して下さる会員の皆さまとともに藤香会が益々発展していくことを願っています。

## 編集後記

満で数えて、今年、古希を迎える人は一九八八年生まれです。そしてその七〇年前は一九一八年で江戸時代最後の年ということになります。このごろ、江戸時代も「自分の手の届きそうな昔」と思うようになりました。年齢のせいでしょうか。(平田)